

「元気いっぱい・笑顔いっぱい」

特別支援教育統括コーディネーター 加賀谷 勝

「子どもは くっついて育つ」

あるお母さんとの面談中、「5年生の男の子なのですが、いまだに一緒に寝てほしい、ギュッとしてほしいと甘えてくるんです」と相談を受けました。

- ・アタッチメント（愛着）の直訳は、「つくこと」。子どもは落ち着かなかったり、心がソワソワしたり、寂しかったり怖かったりするときに、自分よりも大きくて強くて優しく賢い人にくっつく。誰かにくっかせてもらい、安心や安全を感じ、心の穏やかさを取り戻す。くっつく相手は、お母さん限定ではなく、お父さんだったり、おじいちゃん、おばあちゃんだったり、保育園や学校の先生だったりもする。子どもは自分よりも強くて優しい、いろいろな相手との間にアタッチメント関係を築く。
- ・人は生まれるとすぐ母親に抱き付き、つかまろうとする。育っていくためには、つかまり、体に触れ、安らうことができる存在が必要である。母親が子どもを抱っこすることは、栄養を与えることと同じくらい重要である。いくら栄養を与えても、スキンシップが不足すれば、子どもはうまく育たない。
- ・大人は物理的に相手にくっつくことができないとき、頭の中で想像したり、心に思い浮かべたりして、その人のつながりを感じることができる。大人になるにつれ、くっつき方が変わる。抱っこが電話に、おんぶがメールになる。大人も「心の中でくっつく」ことで、穏やかさを取り戻している。
- ・「くっつくこと」は、甘えや弱さではなく、自律した心の成長を支えるもの。私たちは、いつでもくっつけるという確信があるとき、離れることができる。反対に、もうくっつけないかもしれないと思うと、離れがたくなる。くっつくことを考えることは、離れることを考えることになる。



子どもは心が満タンになれば、自分で考えて行動できるようになるので、「お母さん、もう大丈夫だよ」と言う日がくるまで、たくさん甘えさせてあげてくださいと伝えました。

子どもはスキンシップによって、「私は認められている、守られている」ということを実感しながら、大人から離れていきます。



とれたて直送便



「一人一人の子どもが見えていますか？」

学級集団が大きくなると、どうしても一人一人の子どもと先生の個別に関わる時間は少なくなる。しかし、子どもたちは、先生がどんなときに、どんなふうに、自分たちに声を掛けたり、関わったりするかをよく見て、よく感じている。先生がそこにおいて、一人一人の子どもを見守っていることを知っているから、落ち着いて、安心して過ごせる。

子どもが伸ばした手を、握り返す。それが日々続いて、重なって、いつしか子どもと先生の間にあるものが精神的な絆である。